



深田久弥

山の文化館だより

令和7年
秋号

深田久弥 山の文化館
〒912-0067
石川県加賀市大聖寺森場町十八
TEL 〇七六 七二一 三三三
FAX 〇七六 七二一 一八一

山岳画家、山川勇一郎と

深田久弥

第二十回自然ふれあいコンクールの作品募集を行ったところ、今年も市内小中学生の皆さんから多くの作品を応募して頂きました。画家の長谷川 清氏と写真協会会長の宮下一夫氏のお二人に審査をして頂き、入賞作品が決まりました。

加賀市長賞、加賀市教育委員会賞、深田久弥山の文化館賞それぞれ一点と、佳作十一一点、入選十点が選ばれました。これらの入賞作品は九月二十七日（土）から十月十三日（月）まで深田久弥山の文化館聴山房で展示されます。



加賀市長賞
畦地葵心さん
橋立海青学園1年



山の文化館賞
稲手 葵さん
河南小6年

教育委員会賞

堂下拓真さん

動橋小4年

深田久弥と山川勇一郎の出会いには偶然が重なっている。東京美術学校の学生である山川と最初に出会ったのは菅平からの帰りの馬櫓の上だったそうである。そしてまた、今度は乗鞍スキー行の初日に冷泉小屋で出会っている。この出会いにドラマがあった。翌日一行は、山川氏を誘って乗鞍岳に登った。そして山頂で遠くに見える白山の美しい姿を眺めていた。その時の二人の様子を「乗鞍岳スキー行」の一節を引用してお伝えしたい。

「その白山に見惚れていると、僕の隣の山川君が、「僕の故郷はあの山の裏ですよ」と言う。白山の裏なら僕の郷里でもあるので「どこですか。加賀？能登？」と尋ねると、「加賀です」という答。「加賀のどこ？」「大聖寺という町です」一偶然なこともあるものだ。僕は冬の乗鞍の頂上で、故郷の山を眺めながら同郷の人に逢ったわけだ。山川君のお祖父さんは大聖寺藩の士だったそうである。」

この偶然の出会いには、以後大きく発展していくのである。そして、ジュガールヒマール探査行につながっていく。「ヒマラヤン・カ

ルテット」と自称する4人組（文筆家、画家、写真家、医者）がヒマラヤへ行き、帰国後には、めいめいが著作を発表している。山川勇一郎のそれは『ヒマラヤ画集』である。これには当然深田久弥が「ヒマラヤ画集に寄せて」と題するまえがきを書いていく。また、深田久弥の『雲の上の道』には山川勇一郎の挿絵が多く載せられている。以後も二人の交流は続いていく。

山川勇一郎の活躍に焦点を当てた「山川勇一郎の世界」と題する展示の準備を進めています。

この一冊

『うたごえ80』と題する手帳サイズの冊子がある。サイズは小さいが、みんなに大いに山の歌を歌ってほしいという、大きな思いが詰まっている一冊なのである。山の歌について調べる中で、日本山岳文化学会の論集で石丸一夫氏の論文の中で紹介されていた。実物を見たいと思い飛龍高等学校にメールで問い合わせたところ、黒川 勝先生からお電話を頂き、送って頂けることになった。そして、資料文献室に収蔵されている。

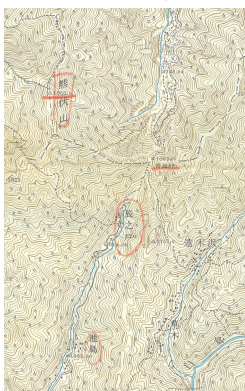


久弥と五万分の一地形図と赤鉛筆と

今回は深田久弥の元旦登山に焦点を当てたい。元旦登山については、このシリーズの第六回「蛇峠山」の回に一覧表を掲載した。亡くなる前の十年間、あまりの人のいない元旦の雪の山頂で缶ビールを飲みながら新年を祝うのが恒例の山行だった。以前に、蛇峠山を含めて四年分紹介したが、他の年の山行も紹介したいと思い、著作と地形図を探し始めた。

まず、昭和三十九年元旦の「青崩峠、熊伏山」から見ていこう。熊伏山は、南アルプス光岳の南西稜線の端で、直線距離十九キロほどのところにある山だった。地形図「満島」(豊橋1)には赤鉛筆のラインは無かったが、熊伏山と青崩峠、

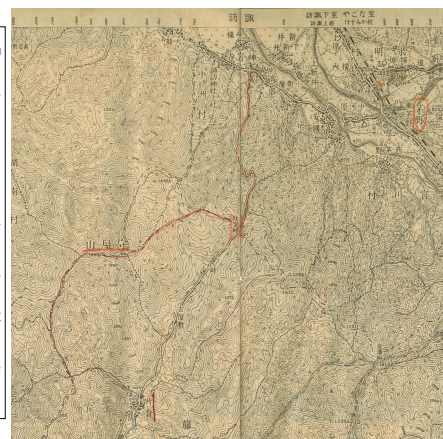
そして麓の二つの地名が赤鉛筆で囲まれていた。



残念ながらこの山行について書かれた文章は「満島」1/5万(豊橋1)見当たらなかった。

つぎは、昭和四十二年の「杖突峠、守屋山」であるが、地形図「高遠」(甲府13)には赤鉛筆のラインがあり、地名、山名にマークがあった。残念ながらこれも文章を見つけられなかった。中央線茅野駅を赤く塗っており、「茅野」の地名が赤で囲まれている。そして、

神宮寺、杖突峠、守屋山、片倉と赤鉛筆のラインが引かれている。茅野駅で降り、このルートを通ったようだ。



昭和四十三年の元旦登山は「御池山と地蔵峠」だった。

「御池山と地蔵峠」と題する一文はあるが、御池山に書き込みのある地形図は無かった。

御池山への地図は「時又」(飯田4)と「赤石岳」(甲府16)だが、昭和十年の光岳登山のラインがあるのみである。「御池山と地蔵峠」の中で「下栗ほど美しい平和な山村を私は知らない。」と書いている「天空の村、下栗」に泊まり、翌日、御池山に登っている。そのあくる日には、下栗から下り、地蔵峠を越えて帰途に就いた。

昭和四十五年の「戸倉山」については、地形図「市野瀬」(甲府14)への書き込みはなく、書かれた文章もなかった。

昭和四十一年は伊那の山とだけ判っているが、山名はわからない。また、四十四年は全く不明である。

参考…「御池山と地蔵峠」「山頂の憩い」

聞こう会

会場…深田久弥山の文化館 聴山房
時間…午後一時三十分～三時

十月十九日(日)

演題…郷土の自然災害のリスクに備えて
講師…松登繁隆氏 (元高校教諭)

十一月十六日(日)

演題…百四丈滝の巨大アイスドームが
出来るまで
講師…永田泰山氏

十二月十四日(日)

演題…山の歌について考え、
そして歌おう
講師…深田久弥山の文化館
伴奏…山先安生氏

読書会

会場…深田久弥山の文化館
時間…午後一時三十分～三時

十月二十四日(金)

『日本百名山』より「那須岳」
十一月二十一日(金)

『日本百名山』より「皇海山」

ホームページもよろしく

<https://yamanobunkakan.com>

深田久弥山の文化館



山文HP